観音様の法力～成熟した逝き方～

船戸崇史

潔さは日本人の死生観の一つでしょう。まさに桜の花はその象徴です。
もしあなたが満開の桜なら、今散る覚悟はできていますか？
今回はそう問われたように感じた一つの魂の散り様をご紹介しましょう。
開業以来２７年、沢山の看取りを体験させて頂きましたが、これほど「潔い散り方」、「成熟した魂」を感じさせて頂いた人はいませんでした。

ある日の電話

ある日、（３月２６日）外来診療中に往診依頼の電話が入りました。
声の主は、１０年ほど前に、がん末期で在宅で看取りをさせて頂いたあるお祖母ちゃんの孫のＹさんでした。

「先生私を覚えていますか？Ｙです。その節はお祖母ちゃんの看取りを在宅でしてもらいました。１０年くらい前でしょうか・・」と言う電話でした。記憶をたどりましたが、その時にはすぐには思い出せず「・・・ええ？まあ・・」とあいまいにご返事して、まずはお話を伺いました。
このＹさんの義理の母Ｔさん（ご主人の母）が、「急に黄疸が出て、動くのが辛くなって食欲が落ちているので、診てくれないか？」という相談だったのです。

勿論、良いのですが、聞くと自宅はクリニックからは結構遠方で、加えて経験上、黄疸があり、食欲低下や運動機能低下は私が診察しても結局精査が必要になる場合が多いので、まずは大きな病院を受診することをお勧めしました。
しかし、本人が絶対病院へは行かないと言います。通常の病院嫌いの人の反応かと思ったのですが、結構筋金が入っているようです。
そこで、この日の診療終了後に往診することになりました。

３月２６日

夜８時過ぎと遅くなってしまったのですが、そのお家に入ると、このＹさんがお出迎えしてくれました。顔を見た瞬間に流石に思い出しました。小さなお子さんを育てながらがん末期のお祖母ちゃんの面倒を看るのはなかなか出来るものではありません。その素敵な笑顔が印象的な子でしたから、直ぐに思い出したのでした。

Ｙさんに案内されてお家に入り、Ｔさんと初めてお会いいたしました。

Ｔさん。６４歳女性。平素はお惣菜作りが仕事です。ご主人と息子（次男）夫婦とそのお孫さんたちと一緒に生活されておられました。
「はじめまして、船戸と言います。１０年ほど前かな、ここの長男のお嫁さん（Ｙさん）のお祖母ちゃんを在宅で診療させて頂きました。そのご縁で今日はお呼び頂いたようです。遅くなってすみません。・・ところで、どうされたんですか？」
Ｔさんは、ソファに座ったまま、体がだるい事、体がかゆい事、食欲がない事、おなかが張ってちょっと苦しい事、血便があった事やそのためか安眠できない事などをぽつぽつとお話してくださいました。

お嫁さんもその話を聞いたのは昨日で、それまではまったく気が付いていなかったと言います。しかし、既に眼球は黄染し、腹部も大きく張っており、かなり腹水がある事は明白でした。加えて両下肢は浮腫が強く、既に一定期間この不調はあったことが伺えました。

腹水があり、黄疸があれば原因は肝臓である事は容易に想像できます。肝臓が中心か、血便もあり大腸が原発で肝臓に転移があるのか？とも思いましたが、まずはやはり精査が必要だと思いました。

ただし、がんに対する西洋医学的治療は、特に「抗がん剤」の悪い風評が高く、その副作用で苦しんだ末に結局亡くなられたという経験があると、最初から病院受診を拒むケースがあります。病院受診⇒検査⇒診断⇒治療（抗がん剤）という流れがあり、病院を受診するという事が、その後の治療としての抗がん剤までセットになっていることへの警戒感からだと思います。そのお気持ちは分かりますが、西洋医学の診断技術は高く、病気診断だけではなく予後予測できることは重要な検査の意義と言えます。確かに、この一連の流れがほぼ自動で流れている傾向も否定できず、ここは西洋医学の注意すべき点であると私も反省しております。

この点を良くわきまえたうえで私はＴさんに「まずは病院で調べられては如何でしょうか？」とお伝えいたしました。

しかし、Ｔさんは「行きません」ときっぱり。

通常は先に挙げた、「もし悪いことを言われたら怖い」とか「抗がん剤は嫌」という恐怖や不安からの拒否である事が多いのですが、Ｔさんからはそれは感じられませんでした。

あとに気がつくのですが、実は既にここからこのＴさんの不思議さは始まっていたのです。

しかしまず現状を把握したいと思い、私はこう提案しました。

「では、まずうちのクリニックまでお出で頂けますか？最低限の採血と画像検査をしたいと思います。抗がん剤などの治療はしませんのでご安心下さい」

本人はそれすら本当は乗り気ではなかったようですが、お嫁さんたちのたっての勧めもあって、しぶしぶ承諾されました。

3月２７日

当院で検査を実施。そして、病気の詳細が分かってきました。

黄疸や腹水から肝臓の疾患がベースと思われましたが、採血と画像から進行した肝臓がんと多量の腹水が認められました。腫瘍マーカーは１４万を超え（正常値１０以下）、肝硬変のデータもありＣ型肝炎抗体が陽性です。しかも貧血があり栄養状態も悪く、所謂カヘキシー

（悪液質）の状態と思われました。以上からＣ型慢性肝炎からＣ型肝硬変となり肝臓がんとなって、既に末期の状態となっていると診断いたしました。

3月２８日

訪問診察。この状況を私はご本人にこう伝えました。「やはり肝臓の問題で、CT で肝臓に影が見られます。結構長く調子は悪かったのかと思いますが、病院へ行ってもっと詳しく調べて治療してもらった方が良いと思いますが・・？」と。

そして、その後ご家族には別室で「かなり厳しい状態です。きっとＣ型肝炎が一番初めの原因で、慢性肝炎、肝硬変となり肝臓がんとなったと思います。栄養も悪く、今後意識障害や吐下血の可能性も否定できません。このままでは余命は１か月は無理かと思いますので、まず入院された方が良いと思います・・どうされるかご家族でご相談ください」とお話させて頂きました。

私は一昨年の胃がん末期のＩさんの経験*から、人の命の限界はその人の心の在り方が大きく影響することを身をもって経験していましたので、安易に本人に対しては希望を失わしめる話はしません。

＊胃がん末期のＩさんはただ愚直に行った５か条（良眠生活、良食生活、加温生活、運動生活、笑い生活。詳細は以前の通信）だけで、肝臓のほぼ９割を占拠した転移巣が４か月で９割消え、腹水も消失するという経験をしました。

西洋医学的なエビデンスレベルで言うと、この期に及んで「希望」になる様な話は嘘つきであり、余命が短いと判断されるならそれを正確に伝え、「思い遺し」のない人生を本人に選んでもらうべきであるという意見もあります。

確かにそれも一理ありますが、果たしてどれだけの人がこの「正確な予後告知＝最後通告」を冷静に聞けるでしょうか？伝えるタイミングや言葉を選んで説明したとしても、中には「死刑宣告」と受けとめ、その後はうつ状態のまま非業の死という経過もありえるからです。

敢えて言えば、私は極力人間のもつ自然治癒力を信じようとする立場をとっています。つまり「生きている限り何が起こるか分からない」というほどの生命力です。それを最も削ぐのが医師の「正確さを重視した予後告知」だと思っています。「統計上、現状では予後６か月」と話せば、医師への信頼感が大きい人ほど、この「６か月」を信じるという事です。人間の凄さは、信じたようになるという事なのです。

「正しいものほどトゲがある」事を肝に銘じるべきだと思っています。

だからこそ、本人には、ご家族にお話した内容は避けて濁したつもりでした。

3月29日

再度ご自宅を訪問しました。その時に開口一番Tさんは、「話は全部聞きました。私が悪くて先が短いならはっきりと言ってほしかった」と言われました。

私は驚きました。ご家族がそのままを全て本人に伝えられたと言うのです。

私；「え・・？・・・全部？聞かれたんですか・・？・・・・」

「・・・じゃあ、思い遺しのないように・・」と話しかけた時、

Tさん；「思い遺すことはありません」「このまま家で逝きます」ときっぱり。

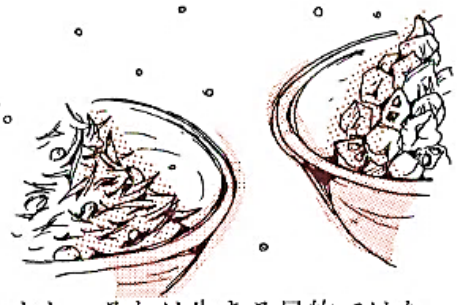
私；「・・・でも、会っておきたい人とか・・？」

Tさん；「いません」

私；「・・・そうですか・・」

長らく訪問診察をしていますが、これこそ死の受容だと思いました。しかし、通常、人は過去に経験のある事なら受容もできるでしょう。しかし、過去に経験のない「死」とは未曽有の体験であり、況や「死ぬほど辛い」というように、苦しみの代表である「自分の死」であるにもかかわらず、きっぱりと申されたのです。しかもしっかり目を開いてです。

私のカルテ記載；「ここまで潔い人は初めて」



しかし、死を受容されても「死にたい」のではないはずです。

私はこう聞きました。

私；「じゃあ、もし・・良くなったら、何がしたいですか？」

Tさん；「・・いつもと同じ・・お惣菜作りかな・・」

お惣菜作りを心から楽しみ、生きがいにしてきたTさん、しかし、それは生きる目的ではない～と感じました。もしそうなら、ここまで潔く「死の受容」をされるとは思えないからです。

Tさんのきっぱりとした「死の受容」には理由(わけ)がある。そう感じながら、それ以上はお聞きするのはやめました。そして、後日その理由が分かったのです。

この間、ご主人は終始涙目で寄り添われていました。伺った時間も夜の8時を過ぎていましたから、2人の息子さんとお嫁さんとそれぞれのお孫さん達5人の総勢10名が集われて、Tさんを囲んでおられました。その心配そうなお顔にはTさんを慕う家族の温かい思いを感じることが出来ました。

そうです、Tさんはこのご家族の温かいオーラに包まれていたのです。

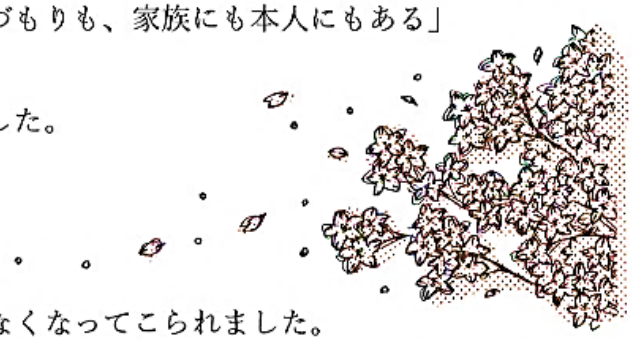
4月1日

当院の金親医師も訪問してくださいました。両下肢の浮腫みがひどく、マッサージを通して浮腫の改善にとどまらない人間としての温かな心の交流が目的です。

金親先生は、アメリカでエドガーケーシーマッサージのフェローの資格を持たれた数少ない医師で、当院で外来や訪問診療をしていただく傍ら、ご自宅でもそのマッサージスキルを関心ある看護師さんなど医療者に教授されておられます。私自身の経験から、そのストロークは、温かくやわらかで、母性を感じさせます。時に、こうしたがん末期の患者さんには、雄弁な言葉より、身体への優しく穏やかなタッチの方が癒されるものです。

先生のカルテから；本人曰く「まったく不安や心配はない。この人生幸せ一杯で良いです」と。患者の訴えは殆どなし。食欲はないが、痛み・辛さ・えらさはなく笑顔在り。家族のサポートも良好で現在の母親の病状を理解したうえでケアしている。旅立ちの心づもりも、家族にも本人にもある」

しかしその後意識レベルが低下していかれました。



4月5日

意識状態が低下され、いよいよ身動きが出来なくなってこられました。

黄疸もより強くなり、腹水もかなり増えています。がん性疼痛も出現し、オピオイドの貼付剤（フェンタニルパッチ）が開始されました。

Tさん「威勢のいいこと言ったけど・・生きるも地獄、死ぬも地獄やな・・・」と漏らされました。肉体に目を向けると、やはり身の置き場のない辛さは相当あるものと推察されました。ここで、あまり辛いなら、セデーションと言う方法**もある事を本人へお伝えいたしました。

最後の最期、本当に苦しい時に私たちは我慢するしかないのかと言うと、そうではありません。セデーションという方法があります。この方法は、使える要件はあるものの、どうしても辛い場合は、私は本人に確認するようにしています。

＊＊セデーション（鎮静）とは

麻酔薬を使って意識水準を下げる行為をいいます。

①不治かつ末期である　②見るに堪えない辛さがある　③他に方法がない　④家族の同意　④複数の医療者の同意　など要件がありますが、本来はホスピスなどでは設置された倫理委員会などで決定されるようです。しかし在宅の現場では、そうした委員会もなく、私は基本的には関わる医療チーム（他の医師や訪問看護師やケアマネ）で検討するようにしています。

最後の最期、経験のない「死」が不安でない人はいません。多くの場合、「死ぬのは仕方ない・・でも、どうやって死んで逝くのかを考えると不安でたまらない」と申されるからです。まさにその通りでしょう。

私；「Tさん、あまりに苦しく辛いなら、セデーションという方法がありますよ。意識があり、呂律が回る今だからこそ、はっきりお別れを申して頂いてから、眠って頂きます。いつまで眠るのか・・それは心臓が止まるまでですが・・・どうされますか？」

Tさん；きっぱりと「しません」。

私は、最後まで自分の意識のあるうちは自分で動き、自己判断で最後まで自らの人生の主人公であることを放棄したくなかったのではないかと今は思っています。苦しさから逃れるよりも自分が分からなくなる方が嫌だという気持ちでしょう。

これも、Tさんならそう言われるだろうと後から反省しました。

4月7日

意識低下強く、時に何とかうなづける程度。黄疸強し。苦悶様顔貌なし。痛みなし。辛さなし。バイタルも測定困難となってきました。

いよいよその時が近づいていると感じました。私は直接閉眼するTさんの耳元でお話しました。

私「Tさん・・聞こえますか？・・よくここまで頑張られましたね。・・もう楽になっても良いですよ。・・ただ、今度はご主人が逝かれる時には、必ずお迎えにおいでくださいね・・お願いしますね・・」

4月8日

当院金親医師訪問。

カルテより「閉眼。呼びかけに反応せず。時間がない旨をご家族にお話しした」

4月9日

意識なし。血圧測定不可。呼吸あるも不規則。余命は時間の単位と思われました。

私はTさんの傍で、ケアされるご主人とMさん（次男のお嫁さん）からこうなる前のTさんのお話を色々とお聞きできました。

ご主人「Tは、1年くらい前から暇さえあれば観音様にお参りしていました。でも、いつも家族への感謝を一人一人の名前を挙げて言っていました。ついに自分の事の祈り事は聞いたことはありませんでした。いつも言っていた言葉は、『人は感謝が大事。ねたまない、ひがまない。それが大事や』と言っていました・・・。観音様を一心にお参りしていたから『死に対する恐怖』を感じてこなかったんかな？・・妻を一言で言ったら『天真爛漫』やね」

自分の事はさておき、家族や縁ある人の幸せを観音様に一心にお願いしていた。だんだん、Ｔさんの本当の姿が見え始めたように感じました。

同じ質問を、Ｍさん（次男のお嫁さん）にもお聞きしました。

Ｍさん「そうですね・・・お義母さんは一言で言ったら、『口の悪い人』でした。『たーけ』『うるせーな』『遅いことならあほでもできる』『カラスにババかけられるぞ～』でした。だから、よくお義父さんとは喧嘩していました。一週間も口をきかないときもありました。でも憎めなかったです」

これには私は驚きました。ここまで、思いやりのあるＴさんからのイメージは、何でも受け入れて決して怒らない平安な人のイメージでした。しかし、ご主人の「天真爛漫」とお嫁さんの「口の悪い人」は、正直で繕わず今その時を一生として生きているＴさんの本性として感じずにはいられませんでした。

私は、ご家族に最期の看取りにあたって重要な心がけをお話いたしました。

「これから最後に向かって大事なことは２つあります。暗くし過ぎない事と、静かにし過ぎないことです。暗さと静かさは不安を助長しますから。ただ、明るい光が直接目に入らないように気をつけてくださいね。ある程度音があった方が良いですが、テレビやラジオなど無機質な電子音は好まれない人が多いです。内容も明日のある人への情報ですから、多くは嫌がられます。思い出の音楽は良いのですが、一番良いのはご家族団らんの声です。特に笑い声。家族の笑い声は、患者さんにしてみたら『自分は迷惑をかけていない』証拠だからでしょうね。そして最後に一番大事なことは、最後の最期『引き止めない』ということです。これから、徐々に呼吸の間隔があいて、弱くなっていきます。もう現段階では苦しみを感じてはおられないと思います。きっと、本人としても、『逝っていいか？』と思われることでしょう。ですから、『ありがとう、後は任せて』とだけ申してほしいのです。言ってはいけない言葉、それは『逝かないで』です。早ければ今日中かもしれません。本人が大丈夫と思ったら、逝かれます。その時に引き止めない事です。私はこれこそ引導だと思っています」とお伝えいたしました。

Ｔさんの臨終

その日の夜、家族全員が仕事や学校から帰り、団らんの中、ちょっと誰もが目を離した１５分の間にＴさんは昇天されました。後日、いかにも迷惑をかけたくないお義母さんらしい逝き方だとお嫁さんは申されていました。

早速クリニックへ電話が入りました。

お部屋の真ん中にＴさんがおられ、ご主人と２人の息子とお嫁さん、そしてお孫さん達家族全員に包まれておられました。

私は静かに心肺停止と瞳孔散大を確認し、時計を確認しました。

「４月９日２０時３分。・・ご臨終です」とお伝えいたしました。

続けて、それまでの経緯を簡単にお話し、私の感じた印象をお伝えいたしました。

「開業して２７年、１５００名を超える沢山の看取りをさせて頂きました。どの死に方も本人ご家族精一杯の素晴らしい見送りでした。しかし、今回のような見送りは初めてでした。いうなれば『成熟した死に方』とでも言うのかな。潔いというのも言い切れないほど潔さ。カッコいいですよね。Ｔさんは自分の状況を全て知った中で、最後まで自分らしくある事を希望されました。嫌なことは嫌だった。その辺ご主人は『天真爛漫』と言われました。正直だから、お嫁さんからも『口の悪い人』と言われました。『たーけ』とか『うるせーな・・あほか』とか・・きっとお孫さん達も言われたに違いない？」（まだ小学生のお孫さんは、涙目を細めて大きく頷いていました）普通、人は死んだことがないから、怖いのが当たり前で、どうしてここまで毅然とできたのか？死を前にしてもジタバタしない・・その強さ。きっと毎日の観音様にお願いしていたお祖母ちゃんの心にその大きな理由があるのだと思います。この強さ。信念。（孫を見て）みんなの、体の中にはこのお祖母ちゃんの血が流れている。だから心配いらない。本当に困ったことがあったら、お祖母ちゃんならどうするかで考える。どうするとお祖母ちゃんは喜ぶかで考える。本当に立派なＴさんでした。今度はご主人か逝くときにお迎えに来てくださいね」

私はその場を離れました。

死を凌駕するもの

しかし、一体何がここまでＴさんに揺るがないものにしたのでしょうか？
それは、Ｔさんが亡くなられて３日後、長男夫婦が挨拶にクリニックに来院されお話をお聞きする中でわかってきたのでした。

息子さん；「母はよく『私は幸せやった。何も悔いはない。かわいいお嫁さんや孫。言う事はない』と言っていました。でも、自分には一つ悔いはあります。もっと早く医者に連れて行ってあげれば良かった・・と。でも、どうせ言っても聞かないだろうけど・・」

嫁Ｙさん：「クリニックへ電話した一日前の３月２５日に、突然お義母さんが『家族会議を開きたいから、全員集まってほしい』と言ってきました。お義父さんと息子２人に嫁２人が集まった所で、お義母さんは突然『今の私の状況はこれ』と言って、ワンピースをめくりあげて両足とお腹をだしました。そこには黄疸で黄色く染まった腫れた両足と、盛り上がったお腹がありました。お義母さんはこう言いました。『このままにしといてくれ。医者へは行かん。ほっといてくれ。父ちゃんの傍に居たい』と。でも翌日先生の所に電話しました。それからはご存じのとおりです。

お義母さんは、いつも観音様に拝んでいました。でも自分の事は何も言わず、いつも夫、息子、嫁、孫、義父まで全員の名前を呼んで、感謝とお礼を言うのが日課でした。本当に自分の欲を出さない人で、本当の意味で世界平和って言える人だと思いました。人生の無駄のない、悪意はなく人として完璧な人だったと思います。お義母さんが亡くなる４日前、私が泣いていると『何が納得できないのか？』と聞かれました。私は不安に思っている事を一杯話しました。そしたら、その一つ一つに丁寧に応えてくれました。私はお義母に聞きました。『お義母さんは、死ぬのが怖くないんですか？』と。すると『・・もっと怖いと思ってたけど、全然こわない。幸せやな～と思うと怖くない。だから、泣くな、あほか！』

そうだったんです。

Ｔさんは、『幸せに満たされると死んでもいい』と本当に思えると言うのです。

そういえば、今から２０年ほど前に肺がんで亡くなられたＳさんを思い出しました。Ｓさんは離婚されお子様一人と生活されていました。そこに再婚の話がでて、その人が素晴らしく、話はトントンと決まったのですが、咳が止まらず検査を受けたら肺がん、しかも末期だったのです。Ｓさんは結婚をあきらめました。しかし、彼はそれを承知で結婚を希望。Ｓさんは入籍しないまま息子を連れて新婚旅行に行かれます。その時のＳさんの言葉。

『彼が現れ結婚が決まって一番人生の最高の時にがん。全部のサポートが完全な時にがん。こんな幸せってあるんですね。もう幸せ過ぎて・・こんなに幸せなら死んでも良いですよね・・』

観音様の法力

私たちは、兎角人生苦しいから死んだら楽になると思います。そうです、苦しみの先に死があると考えがちです。しかし、このＳさんのように、『死んでもいいほど幸せ』という境地もあるのです。

Ｔさんは、毎日観音様にその幸せを「感謝」され「お礼」を言われていました。家族が皆普通に生活できるというこの平凡を心から幸せと感じ感謝できる。しかも、死んでもいいほど幸せと感じていたのではないでしょうか。

その全ては観音様のお陰と思われていたのでしょう。

観音様の法力なのかもしれません。

「ありがとう」の反対は「当たり前」だと言います。当たり前を「普通」と言います。しかし、Ｔさんにはこの「普通」が「当たり前」とは思えなかったのでしょう。

今、眼が見え、手が動き、息ができる。歩けて食べれて話せて、家族が居て寝る場所があって、友もいる、今世界があってきっと明日も普通にやって来る。果たしてどれほど私たちはこれらを意識して生きているでしょうか？況やどれほど、この普通に感謝して幸せだと感じているでしょうか？

私の経験でも、もう病気も末期となり、ベッド上で寝たきりの人に、「もし神様が、最後に極上の幸せの１日をくれるとしたら、どんな１日を希望しますか？」と複数人に尋ねたことがありました。

回答は男性は「仕事の１日」女性は「夕餉（ゆうげ）の支度」でした。

実に日々毎々の平凡な１日だったのです。

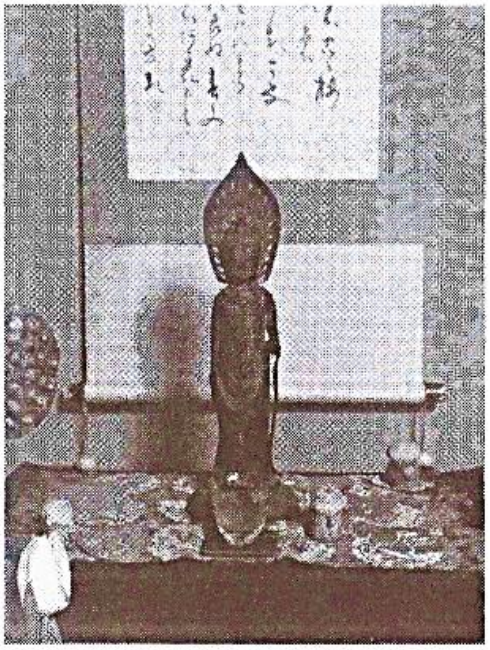
とすれば、私たちは毎日最高の幸せの１日を繰り返している事になります。

Ｔさんはそれが本当に分かっていた人だった。だから、毎日観音様に心よりお礼が言えた。それが延いてはこのあまりにも潔い死に方となったと思われます。

そして、このＴさんの死に様は間違いなく、子から孫の生き様として継承されることでしょう。皆さんの死に様は、皆さんを愛する人の生き様になるという事です。

心よりＴさんのご冥福をお祈り申し上げます。

Ｔさん、また逢いましょう。



Ｔさんが毎日お祈りをささげられた観音様

これからも時々、Ｔさんのお家へお嫁さんが継いだお惣菜を求めに行きますね。